出会い（10）

東西文化の狭間（はざま）

奥村　一郎

奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

南仏の修道院

雲一つなく、眩しいほどの初夏の日射しに覆われた静かな濃紺の海に、ゆったりと純白の巨体を浮かべるマルセイエーズ号に乗船、横浜港を出帆したのは、1951（昭和26）年5月13日、日曜、カトリックの典礼では、聖霊降臨の大祝日であった。さすが、カトリック国フランスらしいなどと思いながら旅の無事を神に願いつつ見送りの友人と別れたのは、もう遠い昔のことになってしまった。

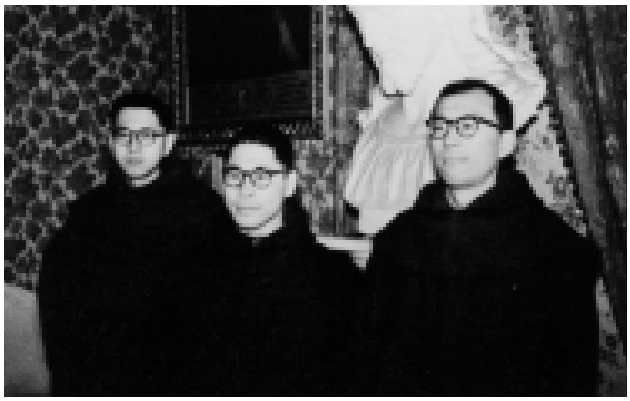
約一か月にわたる、はじめての異国への船旅は、日本人も少なく、未熟な語学力などのために、さまざまな失敗、途中の寄港のたびに珍道中を重ねて、ようやく南仏の港マルセーユに到着した。私にとって、はじめて見るフランスの街、マルセーユでの数日は、今なお、新鮮な思い出となっている。特に、緑が少なく、茶色に乾いた土と砂で盛られた高い丘の上から、青い地中海を見守る真っ白の聖母像（Notre Dame de la garde）の足下に立って眺めた海と街の光景は忘れられない。そこに、二日ほど滞在、その後、ローヌ河が地中海に流れる河口近くの鄙びた街タラスコン（Tarascon）に向かった。聖書にでてくる聖女マルタがその街まできたという伝説からなのか、今もその街の保護の聖人として親しまれている（ルカ10,38-42）。その小さい駅まで車で出迎えにきてくれたF神父が、私にとって、はじめて出会うカルメル会士であった。今の日本では到底見られないポンコツ車に乗せられ、そこから二十分ほどのところにある修道院に着いた。「小城（Petit Castelet:プチカストレ）」といわれる、二階建ての古い建物。玄関でドミニック院長をはじめ、十五名ほどの修道者に温かく迎えられながら、用意されていた修室に通された。古い小さな木机と腰掛。三枚の長板の上に載せられた固い藁のマトラス。あとは何もない至って簡素な部屋。こうして、まだ卵にもならない修道生活が、次第に軌道に乗せられていく日々となっていった。

紙面に限りもあるので、まず、最初のカルチャーショック（culture shock）の生活体験をいくつか紹介することにとどめたい。

1. いちじく採り：ハイ（**Oui**）とイイエ（**Non**）

台所の近くに大きないちじくの木があった。ジャム作りのため、その実をとるように、修練長から言いつかった。木の枝が長くのびて、そばの納屋の屋根までかかっていたので、棒をもってその屋根に登り、今にも落ちそうな屋根瓦の縁を歩きながら、いちじくの実をちぎってはカゴに入れていた。その時、オランダ人の修練長が下を通りながら、私を見上げ、下から大声で叫んだ。「落ちるな（Ne tombez pas）!」。そこで、「ハーイ（oui）」と私は答えた。と、途端に、「バカ（Stupide）!」と、修練長が怒鳴った。私は、なぜ怒られたのか、すぐには分からなかった。否定形の命令や疑問の場合、日本語と欧米語では正反対になることを、その時、身にしみて知った。日本でのフランス語の勉強で教わっていたはずなのに、こんな初歩的なことも、実際となると慣れるのが容易ではない。この頃のように、多くの日本人が英語を習う時も、例外なく体験するはずのこと。言語構造と密接に結びつく精神構造の興味深い違いがそこに見られる。

ところで、いちじく採りぐらいのことなら、深刻なことではないが、同じことが別の形で起きてきた。



1955年2月ローマ・カルメル会総長館応接間にて

2. 哲学教室

その頃、まもなく一年先輩になる二人の日本人神学生が合流、一緒に、哲学の授業を受けることになった。先生は哲学者の院長殿であった。最初の講義は、日本でも良く知られている、E.カント哲学の批判。すなわち、「純粋理性批判」と「実践理性批判」にもとづく「不可知論」について。英語で「agnosticism」といわれる。つまり、純粋理性では、神の存在を証明（独demonstrieren）することはできない。実践的、または、倫理的側面からのみ、神の存在が要請される（独postulieren）と、カントは主張した。自身は敬虔なプロテスタントであったために、神を完全に否定できなかった。最も美しいものは、夜空の星と自分の心の奥深くにある道徳律である、という有名な言葉を残した。つまり、カントの神は、倫理の神であって、存在の神ではない。この微妙な区別は、カトリック神学からすれば、異端説とされ、教会の禁書目録に入れられた。

講義のはじめに、この難しい問題が取り上げられ、「神の存在は理性によって証明できない」という、カント理論を反駁することに終始した。ところで、その頃、カントの緻密な新説が流行になっていた日本の大学知識を、それなりにもっていたわれわれは、下手なフランス語で、生意気にあれこれと大先生に質問したり、反論したりした。そこで、例の言葉の応答形式の問題が否応なくでてきた。話が熱中してくると、Oui（ハイ）と、Non（イイエ）のやり取りがますますおかしくなり、先生もわれわれ生徒も頭が混乱してしまった。そこで、院長先生の方からの命令がでた。「君たちは哲学を学ぶ資格がない。まず、フランス語の勉強をしなさい」と、それで哲学教室は初回で終わり。先ず、フランス語の勉強をということになってしまった。

3. フランス語教室

第二次世界大戦の時戦闘機のパイロットだったF神父が先生。まず、私たちの実力の程をみるため、何か作文を書いて提出するようにと命じられた。仲間の二人は何をだしたか思い出せないが、私は、「一羽の雁」という題で短い童話のようなものを書いた。ストーリは至って簡単。「仲良しの少女と少年、マリー（Marie）とジャン（Jean）が野原で遊んでいたところ、怪我をした一羽の雁が足元に落ちてきました。二人は一生懸命、手当てをしてやりましたが、とうとう、雁は死んでしまいました。そこで、小さいお墓をつくって、そこに可哀相な雁を納めてやり、天国に行けるようにと、一緒に祈りました」

さて、神父先生いわく、「この話は、神学的にいって間違いである。雁などの動物には霊魂がない。天国に行けるように祈るなどというのは、全くナンセンス」と強調。まさに、カトリック神学を支えるスコラ哲学の盲点丸出しの論理で、日本人の自然観とはおよそかけ離れた幼稚な批判に、開いた口もふさがらない。残念ながら、まだ反論するだけの語学力もなく、三人は互いに顔を見合わせて黙っているしかなかった。文字通り、パンチの効いたカルチャーショック。その後にも、これに類したことが少なからずあった。

それから、半世紀を経た今日では、生態学や生活環境についてのエコロジー（Ecology）が著しく発展するとともに、自然と人間との関係をホーリックに把握する東洋哲学を軸とする「調和の神学」が芽生えようとしている。幸いなことである。